

8

異世界に飛ばされた おっさん は 向ぬへ行く?

Where is Ossan going in
another world?



シガレット
cigarette

目次

第2章

エルフの闇（後編）

227

第1章

エルフの闇（前編）

007



スヴェン

エルフの青年。
忌まわしい風習を
なくすべく
立ち上がる。

タクマ

異世界に飛ばされて
きたおっさん。
趣味を楽しみながら
異世界を旅する。

リンド

火竜ジュードの母竜。
タクマの屋敷
近くの森で
暮らしている。

パース

スヴェンの
右腕的存在。
エルフにしては珍しく
人当たりが良い。

エルフの赤ちゃん

タクマが保護した
赤ちゃん。普通の
エルフとは少し違う
特徴を持っている。

タ夏

タクマの婚約者。
タクマと同じように
異世界に飛ばされて
きていた。

タクマの仲間達



ヴァイス



ゲール



アフダル



ネーロ
ジュード



ジュード



プラン



レウコン



ナビ



アルテ



ヴェルド

主な登場人物

第1章

エルフの闇（前編）

1 暴走

異世界に飛ばされてきた普通のおっさん、タクマ。

様々な偶然が重なり、恋人・夕夏と再会した彼は、この世界で彼女と結婚する事を決意し、湖畔に住む家族たちと一緒に、結婚式の準備を進めていた。

また、教育を受けられずにいる子供たちを不憫に思っていた彼は、貧しい子でも気軽に通えるような学校を建て、無事に開校を済ませたのだった。



夜中に目が冴えてしまったタクマは、近くの森に来ていた。

狼の守護獣であるヴァイスと、虎の守護獣であるゲールを連れて散歩する。嬉しそうにする二匹を見てタクマが満足していると、ゲールが話しかけてくる。

（ねえ、お父さん。三日前くらいから森で変な事が起きてるの）

ゲールは、周りの生き物に警戒されないように念話を使ってきた。ヴァイスもゲールに同調して

首を縦に振る。

ゲールとヴァイスによると、森で大きな魔力が発生したり消えたりしているのを感じ取ったという。しかし、ゲールたちが調べてみても、特に異常はなかつたらしい。

（大きな魔力ねえ。んん？ ちょっと前に同じような事があつた気が……）

タクマがそう考えていると、唐突に異変が起きる。

ゲールがさつき言つたように、強大な魔力が発生したのが感じられたのだ。即座にタクマたちは現場に向かう。

「どういう事だ？」

そこは、木々が茂つていてるだけだった。魔力が発生するような要因はない。魔力はすでに消えてしまつていてるらしい。

何もない所に突然魔力が現れる——というのは、日本人の赤ちゃん、タイヨウを保護した時に似ている。もしかしたら、そういう事が起きてるのかもしれない。そう思つたタクマは、魔力を感知する範囲を森全体に広げてみた。

すると、魔力が発生したり消えたりする反応が感じられる。

タクマの頭に一つの予想がよぎる。

「これはもしかして……」

「アウン？（父ちゃん？ 何か分かったの？）」
ヴァイスが首を傾げて聞いてくると、タクマは「あくまで予想だが……」と前置きをしつつ説明する。

「おそらく何かが空間跳躍くうかんちやくようしているんだ。でも、その存在は魔力の制御せいぎょができていらないらしい。つまり、暴走しているんだと思う」

感じ取られた魔力の動きは、タクマの空間跳躍に似ていた。

しかし、それにしては漏れだす魔力が大きい。そこでタクマは、暴走してしまつていると考えたのだ。

ゲールが心配して声を上げる。

「ミアー……（え？ お父さんの言つてている事が本当なら、その人は大丈夫？ 僕が異変を感じたのは三日も前だけど）」

タクマは眉間にしわを寄せて言う。
「もし人だつたら限界は近いか。ただ、むやみに近づいてもしようがない。対応を考えてからにしないと……」

タクマはスマホを取りだし、様々な商品を購入できる能力「異世界商店」を起動した。そして魔力の暴走を止めるのに使いそうな魔道具を探していく。

しばらく商品を見ていると、ナビが現れた。ナビはタクマの鑑定スキルが実体化した存在で、タ

クマの秘書的な役割をしてくれている。

「マスター、先ほどの魔力量だと、通常の魔道具では耐えられないかもしません。神器じんぎレベルの物が必要になるかと」

「分かった。神器で探してみる……」

【魔力量】

.. ∞

【カート内】

・魔力封じの腕輪（神器）	× 1	.. 20 億
・魔力制御のイヤリング（神器）	× 1	.. 15 億
【合計】		.. 35 億

商品を一通り選び終え、決済してアイテムボックスに送る。

それからタクマは、移動を繰り返す魔力の動きを追つてみた。魔力は現れて一分ほどで次の場所へ跳んでいるらしい。

「短い時間しかじつとしていないな。ともかく現れた瞬間を狙つて跳べばいいか。ナビ、魔力の動きを追つて、俺の跳ぶ場所を指定してくれ」

そう言つてタクマは、いつでも跳べるように準備する。スマホの地図を見つつ、ヴァイスたちを

同行させるべく範囲指定しておく。

「……！ マスター！」

ナビの言葉とともに地図にピンが立つ。タクマはその地点を思い浮かべながら、空間跳躍を発動させた。

到着したタクマの目に映ったのは、あまりにも意外な存在だった。

「おいおい……赤ん坊じゃないか。それにしては魔力が大きすぎる」

「ええ、同感です。赤ん坊がこれほど強い魔力を持つなんて……この子が自分で制御するのは不可能でしょうね」

タクマとナビは赤ん坊を刺激しないようにゆっくり近づいていく。

赤ん坊は地面の上をハイハイしており、そのせいで服は泥だらけだった。タクマが十メートルの距離までに近づいた時——赤ん坊と目が合う。

「あいー！ だう！」

「!! マズい！」

タクマは駆けだし手を伸ばしたものの、その手が触れる寸前に、赤ん坊は空間跳躍して姿を消してしまった。

「くそ！ 油断した……」

「あの子、追いかけっこ何かだと思っていたんでしょうか？ すごく楽しそうな顔をしていました」

悔しがるタクマの肩でナビが呟く。ナビが言ったように、赤ん坊はタクマを見て、遊び相手を見つけたような顔をしていた。

「魔力が暴走しているとはいえ、ある程度コントロールできるようですね」

「だな。だが、あのままだと遅かれ早かれ魔力は枯渇するぞ」

「ですね。そうなる前に保護しましょう」

ヴァイスたちも赤ん坊が気になるようでそわそわしていた。タクマは彼らを落ち着かせ、再び周囲の魔力を探る。

すぐさまナビが反応する。

「いました。ここから十キロメートルほど離れた所です」

スマホの地図にピンが立つた。

タクマはさつそく空間跳躍を使って現場へ急ぐ。タクマが駆けつけると、赤ん坊はその場に座り、楽しそうに手を叩いていた。

「あうー、だー」

タクマは赤ん坊には近づかず、ヴァイスに声をかける。

「俺が行くとまた跳んでしまう気がする。行つてくれるか？」

「アウン！（任せて！）」

ヴァイスが赤ん坊に向かって歩いていく。

「う？」

赤ん坊はヴァイスを興味深そうに見ていた。ヴァイスは尻尾^{しつぽ}を大きく揺らしながらゆつくり近づき、赤ん坊を包むように座る。

「どうー」

タクマの狙い通り、赤ん坊はヴァイスに興味を惹かれてくれたらしい。ヴァイスの毛並みを楽し^なく撫^なでている。

「……よし、注意がヴァイスに移つた」

タクマは赤ん坊の視界に入らないように近づいていく。

しかしタクマが接近するにつれて、赤ん坊はなぜかそわそわしだした。視界にタクマを捉えなく^なくても、その気配くらいは感じ取れるのかもしれない。

突然、赤ん坊はヴァイスを撫^なでる手を止める。そして、キヨロキヨロと顔を動かし、タクマを発見。タクマがにつこり笑いかけようとしたところ――

ヴァイスもろとも消えてしまった。

「……なかなかやんちやじやないか」

「マスター、赤ん坊にはヴァイスがついていますので、先ほどよりは多少安全かと。次は位置情報を特定する精度を上げて、ギリギリに跳べるようにします」

ナビはそう告げると検索に集中し、すぐに赤ん坊の居場所を発見する。

「見つけました」

「ありがとう。じゃあ、迎えに行こうか」

空間跳躍したタクマが現れたのは、赤ん坊の目の前だった。

赤ん坊はヴァイスの耳を引っ張り、キヤッキヤとはしゃいでいる。タクマには気づいていないらしい。

タクマは、用意していた魔封じの腕輪と魔力制御のイヤリングを、すぐに赤ん坊に着けた。

「あう？」

赤ん坊はハッとした顔をしている。再び空間跳躍で逃げようとしたが、神器の効果により何も起^こらないようだ。

「よし。魔力が枯渇する前に、保護できたな」

タクマはそう言つて一息つくと、赤ん坊を抱き上げた。

赤ん坊は嫌がるように、タクマの頬を叩く。

「ふー、だぶー」

「遊んでたのを邪魔して悪かつたな。だけど、あれ以上魔法を使つたら危険だつたんだぞ。あとで

思いっきり遊んであげるから今は我慢してくれ

タクマは赤ん坊にクリアの魔法をかけ、服の汚れを取つてやつた。

「あだー、あうー」

綺麗になつた赤ん坊はタクマの言つた事を理解したのか、機嫌を直してくれたようだ。

タクマは大きく息を吐く。

「やれやれ、一応どうにかなつたな」

タクマが視線を移すと、ヴァイスたちも嬉しそうにしていた。

改めて赤ん坊の容態を調べ、魔力が暴走していた以外に何も問題がないのを確認する。そうして一通りチェックが済むと、タクマは呟く。

「しかし、この子はいつたい」

赤ん坊は三日も暴走していた。膨大な魔力を撒き散らしながら、一分ごとに空間跳躍を繰り返していたのだ。それにもかかわらず少しも衰弱していない。

また、見た目からして普通の子ではなかつた。耳が長くとがつており、エルフという種族のようだ。しかしそれにしては、肌が透き通るように白く、髪色は白に近い銀髪である。エルフだとしても、どこか違和感がある。

「アウン？（その子、連れて帰るの？）」
ヴァイスが心配そうに尋ねてくる。



タクマはヴァイスに向かって頷くと、森全体に気配察知を発動させ、周辺に危険な存在がないか確認した。

ここへ来たのは夜中で、朝まではまだ数時間ある。

こんな時間に屋敷に戻つても迷惑がかかるだろうと考えた彼は、少し時間を潰してから帰る事にするのだった。

森の入り口まで戻つたタクマは、そこにテントを設営した。

赤ん坊をテントの布団に寝かすと、ゲールが傍らにいてくれると言つた。タクマはゲールに赤ん坊を任せ、テーブルの上にミルクの準備をしておく。

テーブルセットの椅子に腰掛けつつ、タクマはヴァイスに尋ねる。

「この子に親はいるのかな？」

「アウン（お母さんたちがいるなら、返してあげないと）」

もし親がいるなら子供がいなくなつて、心配しているだろう。ならば、できるだけ早く返してあげなくてはいけない。

タクマは心配そうな表情を浮かべつつ続ける。

「だが、どこから来たんだろう。この辺では見ない種族だ。空間跳躍を繰り返していたんだから、もしかしたら遠くから来たのかもしれないな」

そうしてタクマが考えを巡らせていると、テントの中から泣き声が聞こえてくる。

「ふえつ、ふえーん！」

「お、起きたか」

ミルクを手に取つたタクマが、テントの中に入つていく。それから必死に泣く赤ん坊の隣に座り、膝の上に優しく抱き上げた。

「よしよし。ほら、ミルクだぞ。ゆつくり、ゆつくり飲むんだ」

赤ん坊の口元に哺乳瓶を運んでやると、赤ん坊はミルクを美味しそうに飲んだ。その様子を見て、タクマは安心する。

「良かった。何日も栄養補給をしていなかつたからか、すごい勢いだ。だが、随分と元気な子だな。衰弱しているよりは良いが……謎が多い」

赤ん坊はあつという間にミルクを飲みきつてしまつた。

タクマは哺乳瓶をヴァイスに渡し、赤ん坊を抱いたまま立ち上がる。そして、ポンポンとその背中を叩いてやつた。

「ケプツ」

ゲップをしてくれたのを見つつ、そのまま赤ん坊の背中を擦る。すると赤ん坊は、再び眠りに就いた。

タクマは赤ん坊をゲールの横に下ろす。ゲールの体温で安心して眠つてくれるだろうと考えたか

らだ。

赤ん坊はゲールに抱きつき、寝息を立て始めた。

その後、夜が明けるまで、タクマたちはのんびりと過ごすのだった。

数時間後。

目を覚ました赤ん坊は、タクマたちに怯える事なく落ち着いていた。タクマは赤ん坊を抱き上げ、テントを片付ける。

「あうー、だつ、だつ！」

赤ん坊はヴァイスとゲールに興味津々らしい。二匹に向かって、必死に手を振っている。

「ん？ ヴァイスとゲールに触りたいのか？」

タクマは赤ん坊を抱いたまま、ヴァイスたちの目線に合わせて屈む。

すると、赤ん坊はヴァイスたちに小さな手を伸ばした。そして、キヤツキヤとヴァイスたちと触れ合っている。

そんなふうにあやしながら片付けを終えると、タクマは赤ん坊に話しかける。

「さて、帰るかな。よしよし、これから俺たちの家に行くぞ。家にはいっぱい動物がいるからな」「う？」

赤ん坊はタクマの言つた事が分からぬだろうが、一応返事をしてくれた。

タクマはそのまま空間跳躍で自宅の庭へ跳ぶ。

庭に到着すると、家の中から執事のアーツが迎えに出てきた。アーツは、タクマが夜中に散歩に出たのを知つており、早めに起きて待つていたという。

「タクマ様。おかえりなさいま……ん？ その子は……」

アーツは言葉を止め、赤ん坊に目を向ける。

そして、突然表情を変えた。

「まさか……」

「ん？ どうした、アーツ？ この子について何か分かるのか？」

タクマがそう尋ねると、アーツは言いにくそうにしたもの、やがて口を開いた。

「……おそらく、その子はエルフの忌み子です」

「忌み子？」

アーツは続けて説明しようとしたが、周囲を見渡して口をつぐんだ。

どうやら外で話すような内容ではないらしい。家に入るように促すアーツに導かれるまま、タクマは執務室へ向かつた。

2 捨てられた赤ん坊

「で？ なぜこの赤ん坊は忌み子なんだ？」

タクマは赤ん坊をあやしながら尋ねる。

アーツは複雑そうな表情を浮かべ、説明を始めた。

「この子は普通のエルフではありません。見た目が違うのです。特に気になるのが、髪の色。本来エルフは金髪であるはずですが、その子は銀髪です。また、容姿も美しすぎるようになります。エルフは美しい見た目の種族ですが、あまりにも整いすぎています」

アーツが言うには、エルフの中では稀にこうした子が生まれる事があるそうだ。しかも、そうした子の場合、保有している魔力が桁違いに多いという。

「髪色の違ひなんて些細な事じやないのか？ 個人差もあるだろうし。それに、魔力が多いというのは良い事じやないか。どうして忌み子と呼ばれるんだ？」

タクマはアーツの話を聞いて、いまいちピンと来ていなかつた。

アーツが神妙な面持ちで続ける。

「エルフには許しがたい事らしいのです。エルフの間では、銀色は不吉な色と言われています。し

かし、銀髪の忌み子はすぐに殺されると聞きましたが……」

タクマの表情が曇つていく。

楽しそうにじやれていた赤ん坊が、タクマの表情の変化を感じて、今にも泣きそうになつてている。

タクマはそれに気づき、優しい笑みを浮かべる。

「……忌み子を森に捨てるわけはありません。バレてしまえば身内の恥を晒す事になるわけですから……だからこそ、その子が今ここにいる意味が分からぬのです」

そう説明したアーツに向かって、タクマは言う。

「なるほどな。この子がここにいる理由は……この子の魔力が暴走し、空間跳躍の魔法が発動したからだ」

「そうですか。そんな事があつたのですか。でも、話に聞いていた通り、忌み子は体が丈夫なようですね」

アーツの返答に、タクマは首を傾げる。

「忌み子が丈夫？ 確かに、この子は衰弱してなかつたな」

すると、アーツはいつたんごもり、銀髪のエルフが忌み子にされるに至つた経緯について説明だした。

「……はるか昔は、髪の色が違つていたからといって、忌み子という扱いはされていなかつたそうです。きつかけはとある事件があり……」

銀髪の赤子が生まれた瞬間、魔力を暴走させた出来事があつたという。その暴走は大人のエルフでさえ止められず、大きな被害を出したらしい。以来エルフたちは「銀髪」を忌避するようになり、忌み子として殺してしまった風習が生まれたとの事だつた。

話を聞いたタクマが神妙な面持ちで言う。

「そうか。エルフたちの気持ちも分からんでもないが、一度の事件で銀髪の子すべてを処分してしまうようになるとは……ところで、この子の親が探しているっていう可能性は？」

アーネスが悲しそうに答える。

「……ありません。忌み子が生まれた時点で、親は養育を放棄するそうですから」

「アウン！（ひどい！ 赤ちゃんは何も悪くないのに！）

話を聞いていたヴァイスが怒りの声を上げる。

タクマはヴァイスを見て、同じ意見だと頷く。

「下らん風習だ。魔力が暴走して危険だといつても、何か考えを巡らせるべきなのに。銀髪の子が生まれたらすぐに殺すなんて安易すぎるな」

「ミアーー！（そうだよ！ 子供は守るものだよ！）

優しい二匹は怒りを隠さなかつた。

タクマは彼らを宥めつつ、アーネスに改めて確認をする。

「で、この子は本当に忌み子なんだな？」

「はい……確実かと。ただ、タクマ様の鑑定で見た方が良いかもしません」「分かつた。それはやろう。でだ、この子が忌み子だつた場合、俺が引き取ろうと思う。それに異論はあるか？」

アーネスは首を横に振る。

「忌み子というのはエルフの中だけの事。魔力の暴走も、それほど恐れるものなのか疑問に思います。うちには様々な種族の家族がいますから、きっとエルフだけの集落よりも健やかに育つてくれるでしょう」

アーネスの言葉に満足しつつ、タクマは赤ん坊の鑑定を行う事にした。

「じゃあ見させてもらうかな」

そう言って赤ん坊をあやしながら、鑑定を発動する。

【名前】	..なし
【年齢】	..生後三か月
【種族】	..ロイヤルエルフ
【魔力】	..10億（神器によって封印中）
【スキル】	..魔力変換（極）、体力増強（極）、空間跳躍（大）
【称号】	..エルフの忌み子、聖獣の加護×2、半戦神の加護

称号に「忌み子」と表示されているため、この赤ん坊が忌み子であるのは間違いないようだ。

魔力を相当量持っているだけでなく、スキルまで保持している。森で耐えきれたのは、この魔力とスキルがあつての事だろう。

いつの間にか、タクマの加護とヴァイスとゲールの加護が加わっていた。それ以上に気になるのは種族の表記だ。エルフではなく「ロイヤルエルフ」となっている。

タクマがその事について考えていると、アーツが心配そうに声をかけてくる。

「タクマ様、いかがでしたか？」

「ああ、この子は間違いなくエルフの忌み子なんだが……」

「だが？」

タクマが濁したので、アーツは何かあると感じてさらに尋ねる。

「タクマ様。気になる事があるのでしたら言つてください」

「この子の種族がロイヤルエルフだつたんだ……エルフの上位種だと思う」

おそらくこれまで殺されてきた銀髪の忌み子たちも、同じくエルフの上位種だつたと見て間違いないだろう。

タクマのその推測はアーツにも伝わったようで、彼は言葉を失っていた。

「ま、まさか……そんな事が？ では、エルフたちは自分たちより優れた存在を忌み子として始末

していたという事に……」

「そうだな。鑑定もせずに処分をしたのだろう」

タクマは深い悲しみを感じ、ため息をついた。

「放つておいたら、この子と同じ境遇の子供が増えてしまうな。どうにか忌み子の風習をやめさせる手立てを考えるしかないか」

そう言つてタクマは、赤ん坊を優しく撫でてやる。そして悲しげな表情のままアーツに告げる。

「夕夏を呼んでくれるか？ あいつにも言つておかないと」

「そうですね。呼んでまいります」

アーツは、すぐに夕夏を呼びに行つてくれた。

しばらく待つていると、執務室をノックする音が響く。

迎え入れたところ、夕夏が入室してきた。

「呼んだ？ まつたくよく分かんない理由で朝帰りしてくるんだから……え、赤ちゃん？」

抗議し始めた夕夏が、タクマの胸に抱かれた赤ちゃんを見て動きを止める。

タクマはすぐに、赤ん坊を保護した経緯を話した。

赤ん坊は夕夏に興味を持つたらしく、手を伸ばし触ろうとしていた。夕夏もタクマの話を聞きつつ、目線は赤ん坊に釘付けだった。

子供好きな夕夏に赤ん坊を渡してしまうと話を聞いてくれなくなる。そう思ったタクマは、そのままの姿勢で話を続ける。

一通り話し終えたところで、夕夏は深いため息をついた。

「……分かったわ。とにかく、この子のような可愛い赤ん坊を殺すなんて絶対に許せない。この子はここで幸せになつてもらうわ」

それから夕夏はタクマから赤ん坊を受け取り、目を細めて赤ん坊に話しかける。

「ようこそ赤ちゃん。私は夕夏よ。今日からあなたは私とタクマの家族。一緒に幸せになりますよ」

赤ん坊は夕夏を見て、安心できる人間と分かつたようだ。満面の笑みを浮かべて、夕夏の顔を触る。

「みんなに紹介しないと！」

夕夏はそう言うと、他の家族たちのもとへ移動しようとした。

しかし、タクマがそれを止める。

「こら、この子は保護したばかりだつて言つただろう。いくら元気に見えるとはいえ、数日間、森をさまよっていたんだ。今日はゆっくり寝かしてやるのが良いだろう」

タクマは、アイテムボックスからPCを取りだす。そして、異世界商店を起動させた。

〔魔力量〕	.. 8
〔カート内〕	
・ベビーベッド（布団付き）	.. 15 万
〔合計〕	.. 15 万

さつそく寝室に移動して、購入したばかりのベビーベッドを設置した。

夕夏を呼んで、赤ん坊を寝かしてやる。赤ん坊は初めはもぞもぞ動いていたが、すぐに眠つてくれた。

夕夏は、赤ん坊の可愛い寝顔にメロメロになつていて。タクマはそんな夕夏に声をかけ、応接室に行つて、みんなを集めてくれるようになつた。赤ん坊の頭を撫で、ふと思案する。

赤ん坊と二人つきりになつたタクマ。赤ん坊の頭を撫で、ふと思案する。
(しかし、まさか上位種だとはな。まあ、いいさ。うちの家族たちは種族で人を見る事はないから、この子にとつても幸せだらう)

その後、タクマは赤ちゃんをヴァイスたちに任せ、応接室へ移動した。

タクマが応接室にやつて来ると、子供たちをはじめとして全員が集合していた。どうやら夕夏に加えて、アーフスまで動いてくれたようだ。

アーネスは相変わらず仕事が早い。

「おう、タクマ。朝っぱらからどうした？ 何か問題か？」

「子供たちを孤児院へ連れていくために来ていた、元門番のカイルが聞いてくる。

「ああ、朝方にちよつとした事があつてな。結果を最初に言つておく。森で赤ん坊を保護したんだ。で、俺が引き取る事にした」

タクマはさらつと言つたが、大人たちは驚いていた。赤ん坊が森にいて無事で済むはずがないのだ。

カイルが焦つたように尋ねる。

「ちよ、ちよつと待て。赤ん坊を引き取る事に反対する気はないが、赤ん坊を森で保護だと？」

「ああ、言いたい事は分かつて。ちゃんと説明をするから」

それから大人たちは、タクマの言葉に耳を傾けた。

赤ん坊がスキルを使って森の中で数日を耐えきつた事、また空間跳躍でさまよつていた事を聞いて、皆、言葉を失つた。さらにタクマの口から出たのは、その赤ん坊がエルフの忌み子だという事だつた。

カイルは表情を歪める。

「タクマ、お前は予想しているかもしけんが、もしかしたらエルフと戦う事になるかもしえないぞ？ エルフは身内の恥に執着する。忌み子はその最たるものだ。恥ずべき忌み子が生きていると

知られたら……」

「奪いに来るだろうな。だがな、あの子に何か罪があるのか？」

そう言つて笑うタクマを見て、カイルは察したようだ。

「そうか。端はなからリスクを分かつたうえで言つているのか。だつたら俺は賛成だぜ。お前の庇護ひごがあるなら、その赤ん坊は安全だしな」

他の大人たちも、タクマとカイルの会話を聞いて、全員が賛成してくれた。

タクマの集落に住む女性の一人であるファリンはエルフの風習を聞いて怒つていた。それ以外の者もarieないと憤りを露わあらわにしている。

そんなふうに話していたら、子供たちがタクマを囲みだした。純粹に家族が増える事を喜んでいるらしい。

「新しい家族？」

「赤ちゃんなの？」

「可愛い？」

「見たい！」

子供たちは目を輝かせて、エルフの赤ん坊について聞きたがつた。

タクマは彼らに優しく告げる。

「ほら、落ち着いて。赤ん坊は疲れて寝室で眠つているんだ。もしどうしても見たいなら、静かに

覗いてみるんだぞ」

子供たちは聞き分けが良いので、タクマは「静かにするなら」とだけ注文を付けて許可してあげた。夕夏に引率を頼むと、彼女に連れられ子供たちが出ていく。

大人が残された応接室で、エルフの赤ん坊をどう育てていくか話し合われ、すぐに特別な事をせずに健やかに育てていく事に決まった。

子供たちが戻ってくる様子がないので、タクマが寝室に顔を出してみると——子供たちは赤ん坊に見入っていた。

「可愛いねえ……」

「小さいね」

「今日から家族だね」

「弟？ 妹？」

子供たちは、赤ん坊の髪の色は気になつてないようだ。ただ、この赤ん坊が新しい家族で、自分たちが守つていく存在という事は、しつかり認識しているらしい。

タクマは「赤ん坊が起きてしまうと大変だから」と言い聞かせ、子供たちとともに応接室に戻つた。

すると、カイルが待ちくたびれたかのように言う。

「やつと戻つてきたかー。ほらお前たち！ 孤児院に行くぞー。あつちで待つている子もいるんだ

からな」

「「「はーい！」」

カイルの呼びかけに素直に応じた子供たちは、孤児院へ向かつた。夕夏は、日本人召喚者であるミカと一緒に、針子のトレスの所へお手伝いに行くらしい。

そんなこんなで、みんなして子供たちとともに移動していった。

応接室で一人になつたタクマ。

すると彼は、このタイミングを見計らつてアーチスを呼ぶ。エルフについて、もう少し踏みこんだ話をしたかったのだ。夕夏は、アーチス。エルフの忌み子という風習は何年くらい前から行われているんだ？ 最近できただけではないだろ？」

「そうですね。私が見た文献では、十四百年ほど前から行われていると書いてありました。エルフは長命種で、千年以上生きると言われております。この不合理な風習が廃れていないのは、エルフの長命さも関係しているように思います」

確かにアーチスの言う通りだとタクマも思った。

たぶん、銀髪の赤ん坊が魔力を暴走させた事件を体験した者が存命なのだ。恐怖心がある間は、この風習は残り続けるだろう。

「うーん、この風習をやめさせるにはどうしたら良いかな?」

アーツの言う通り、この風習は不合理だった。

魔力の暴走は魔道具で制御できるし、そもそも忌み子はエルフの上位種であり、殺すべきではない。何より、生まれてすぐの赤ん坊を殺すというのが、タクマにとつては許せなかつた。

尋ねられたアーツは、考えこみながら口にする。

「エルフの長おさと話をすると、王に会える者が限られています。各国の王くらいの者でない」

「王か……それじゃあ会うのはなかなか厳しそうだ……って、そんな事ないか!」

タクマはそう言うと、王につないでくれるであろう、ある一人の男を思いだすのであつた。

3 難題

タクマは再び寝室に移動し、赤ん坊が眠っているのを確認する。それから、赤ん坊を起こさないように優しく抱き上げ、そのまま庭に出た。

ヴァイス、ゲール、鷹たかの守護獣であるアフダルを呼び、赤ん坊を狙つてエルフが来ていないか、警戒するようにお願いする。ヴァイスたちは周囲の警戒度を上げるべく、森へ消えていった。

「さて、コラル様の所にこの子を連れていくてみるか」

タクマはそう呟くと、コラルの邸へ跳んだ。

迎えに来た使用人に案内され、執務室へ通される。

タクマがノックをして入室すると、書類仕事に追われていたらしいコラルが声を上げた。

「タクマ殿か? ちょっとソファーで待つてくれ」

タクマは赤ん坊を抱いたままソファーに座る。しばらく待つていると、疲れた表情を浮かべながらコラルがやって来る。

「ふー。この前は酒に付き合つてくれてありがとう。とても良い時間だつたな。で、今日は……つてまたか」

タクマが抱いている赤ん坊を見て、コラルはまたいつもの厄介事だと察した。

タクマは苦笑いを浮かべ、赤ん坊を保護した経緯を説明する。話を聞くにつれ、コラルの顔色が変わっていく。

コラルは、まさかエルフという名が出てくるとは思つてもみなかつた。それどころか、よりもよつてエルフの忌み子だとは。

「タクマ殿、その赤ん坊は本当に忌み子なんだな?」

「ええ。先ほど鑑定で確認しました」

コラルはこめかみを押さえながら話を続ける。

「君が言いたい事は大体予想できる。君はこの子を養子にするつもりなんだな？」

「はい。エルフのもとに戻せば殺されてしまうでしょう。魔力の暴走で俺たちの集落近くに跳んできたのは、逆に運が良かったのかもしれません」

エルフの忌み子を養子にする事は、すでに家族にも報告してある。タクマは、エルフの忌み子を引き取る事には、すでになんの障害もないとコラルに伝えた。

「だったら手続きしてしまおう。手続きが済めば、エルフといえど口出しできなくなる。これで、エルフがその子に執着する事はもうないと思う」

ちなみに、コラルもエルフの忌み子の風習について知っていた。コラルが学生だった頃、少しだけ研究をしていたからだと言う。

そんな会話をしながら、コラルは使用人に声をかけ、手続きをするために役人を連れてくるように指示した。

しばらく待っていると、役人がやつて來た。

その場でタクマは書類に記入していたのだが……いくつか問題が噴出する。

「タクマ様。この子の性別と名前は……」

タクマは、赤ん坊の性別を確認していなかった。それに、名前も決めていない。

役人から名前は後日で良いと言われたので、ひとまず性別だけ調べる事にした。見た目から女の子だと思つていたが、エルフの事なので分からぬ。念のため鑑定してみると、やはり女の子だつた。

書類に性別を記入し、役人に渡す。

「確かに受け取りました。名前は一日以内に決めていただけたらと思います。養子の登録はしておきますので、名前が決まりしだい、ご報告ください」

役人はそう言うと、そそくさと書類を持って退室していった。

役人がいなくなつたのを確認し、コラルは改まつて言う。

「……さて、タクマが来たのは、養子の登録だけが目的ではないのだろう？」

「どうやらコラルはお見通しだつたらしい。さつそくタクマは本題を切りだす。

「忌み子はこの子だけではありません。これまでにも忌み子はおり、そしてこれからも生まれると思います。これ以上、悲劇を繰り返さないためにも、忌み子を殺すという風習自体をどうにかしたいのです」

コラルの表情は、これまでにも増して険しくなつた。

「なるほどな。それにはエルフの長を説得する必要がある。国王であるパミル様に頼めば、エルフの長に会う事はできるかもしけんが……会えたからといってうまくいくとも思えん。この長という

のが、なかなかに厄介でな」

続けてコラルが話してくれたのは、エルフの長にまつわる困難についてだった。

エルフの長は古き風習を大事にするタイプなのだそうだ。さらには、頑固で絶対に意見を曲げる事がないという。

「そんなわけで、この問題は一筋縄でいかんのだ」

コラルの言うように、思った以上にハードルは高そうだ。だが、忌み子の命がかかっており、諦められない。タクマはそう考えて表情を強張らせた。

コラルが真剣な眼差しで告げる。

「明日にでもパミル様に話そう。エルフの長との面会はできると思う。それが決まってから、どうしていくか考えよう」

「分かりました。その場を設けてくれるだけでも前に進む事ができると思いますので、お願ひします」

タクマとコラルは握手を交わし、これで話は終わりとなつた。

最後まで厳しい表情を崩さなかつたコラルと別れ、タクマは町へ向かつた。せつかくトーランに来たので、久しぶりに教会に寄ろうと思ったのである。

赤ん坊とともに教会に来たタクマは、シスターのシエルに挨拶し、礼拝堂に入つた。

シエルは、タクマがエルフの赤ん坊を抱いているのを見ても慌てる事はなかつた。どうやらカイ

ルと子供たちから聞かされていたようだ。

タクマは女神像の前で立つたまま祈りを捧げる。赤ん坊を抱っこしており、^{ひざまづ}く事はできなかつたからだ。

無事に、いつもの白い空間にやつて来る。この世界の女神であるヴェルドが、タクマの目の前に立つていた。

「タクマさん、お久しぶりです。それと、あなたは初めてね」
ヴェルドはそう言つて、赤ん坊の頬を撫でた。赤ん坊は嫌がる事なく、ヴェルドの手を受け入れる。

「さあ、立ち話もなんですし、座つて話しましよう」

今日のヴェルドはどこか落ち着いていて、^{そうこん}莊厳な雰囲気を醸していた。

ヴェルドはこれまで「残念さ」ばかりが目立つていたが、なぜかそうではない感じだ。もしかしたら、初対面の赤ん坊相手に格好つけているのかもしれない。

そんな事を思いながら、タクマがテーブルセットに着席すると、ヴェルドが話し始める。
「今日、タクマさんがここへ来たのは、その子の事ですね。念のため言つておきますが、その子がタクマさんの近くに跳んできたのは偶然です。私は関係ありません。ただし、この子が最初に空間跳躍した時はさすがに危険すぎたので……しばらくモンスターに襲われないように細工くらいはし

ましたよ」

ヴエルドの言い方にはなぜか言い訳がましさがあるが……とにかく彼女の意思で赤ん坊とタクマを会わせ、タクマに厄介事を背負わせたわけではないらしい。

ヴエルドが介入したのは、赤ん坊が襲われないようにする事だけだったようだ。

「ロイヤルエルフの赤ん坊は防衛能力が秀でています。これは、エルフの頂点に君臨する種族であるため。それにもかかわらず、エルフがロイヤルエルフの赤ん坊を殺し続けていた……とは予想外でした」

「なるほど。ヴエルド様も気づかなかつた、不本意な状態だと」

「その通りです。ですが、お願いがあります……」

ヴエルドは今回の一件でタクマが動くのは待つてほしいと注文を付けた。どうやら、タクマの知らないところで、すでに事が進んでいるという。

タクマが不満に思つて言う。

「待つのは構いませんが、この子を捨てた親に何か言わないと気が済みません」

タクマは、この子の両親が進んで我が子を処分しようとしたと思っていた。しかし、実際はそうではなかつたらしい。

「この子の親たちは……この子が空間跳躍で集落から逃れた後に……」

……風習に反抗していたため、処刑されたという。

「それは酷い。しかし、この子は捨てられたわけではなかつたのですね？」

「もちろんです。この子の両親は赤ん坊を救うためにたつた二人で戦い、力尽きました」

タクマは自分の思いこみを恥じ、両親の死をいたみ、その一方でこの子が愛されていた事を知つて喜んだ。

悲しい結果になつたが、子を守るために両親が戦つたというのは、この子にとつてかけがえのない事だ。そう思つたタクマは安堵するとともに、風習に縛られたエルフたちに対し、改めて強い怒りを覚えた。

ヴエルドはその雰囲気を感じ、タクマを落ち着かせる。

「タクマさん、先ほども伝えましたが、エルフに干渉するのは待つてください」

「……」

タクマはヴエルドの言葉を噛み締める。ヴエルドが止めるという事は、何か重要な理由があるのだ。

ヴエルドはさらに続ける。

「確かに、タクマさんが介入して風習をなくす事はできるでしょう。ですが、それではエルフのためにならないのです」

ヴエルドが話したのは、現在進行形でエルフの自浄作用が始まつてゐる、という事だつた。

エルフの若者たちが、古い風習に囚われた各集落の長老を打倒すべく動いてゐる。エルフは自ら

の力で変わらうとしているのだ。

「タクマさんが怒っているのは分かります。ですが、彼らの行動を見守つていただけませんか？もし、若いエルフたちが負けてしまった場合は介入してくれて良いですか？」

「そう言って頭を下げるヴェルドに、タクマは小さく「分かった」と返す。

「彼らが自ら悪しき風習をどうにかしようとしているなら、俺に言う事はありません。自分たちで変われるのなら、そちらの方が良いでしようから」

続けてタクマは、付け加える。

「エルフの問題に距離を置くとしても、この子の親の形見かたみは手に入れたいです。また、遺体が埋葬まいそうされていないのなら、弔とやつてもあげたいです」

タクマの願いを聞き、ヴェルドは悲しみの表情を浮かべた。そしてひときわ苦しそうに、その事実を告げる。

「……二人の遺体は集落から離れた山に打ち捨てられています」

「捨てられてるだと？ 死者にそんな扱いをするのは許せませんが……エルフの未来は若いエルフたちの手に委ゆだねます。俺は遺体を迎えに行って、安らかに眠らせてやろうと思います」

タクマは冷静を装つていたが、内心は怒りに震えていた。

赤ん坊の両親は今後、この子の成長を見届ける事はできない。だが、せめて魂となつてこの子の近くにいられるように埋葬してあげたい。タクマは強くそう思った。

ヴェルドが頭を下げて言う。

「お願いします。彼らの魂は死してなお、肉体の周辺を離れられません。きっと、この子の事が気がかりなのでしょう。タクマさんの手で天に帰してくださいますか？」

「もちろんです。彼らをきっと送り届けます」

ヴェルドはタクマの力強い返答を聞くと、優しい笑みを浮かべた。それから、タクマと赤ん坊を白い空間から送りだした。

4 赤ん坊と子供たち

ヴェルドとの話を終えたタクマは、孤児院に寄る事にした。赤ん坊を、孤児院の子供たちにも会わせようと思ったのだ。

さつそく孤児院を覗くと、子供たちは休憩中だつたらしく皆そろつて木陰こかげに座つていた。

「あ！ お父さんだ！」

「赤ちゃんもいる！」

子供たちは、タクマと赤ん坊の姿が見えた途端とだん、立ち上がりつて走り寄つてくる。

「みんな、修業を頑張つてるみたいだな」

タクマは子供たちにそう語りかけ、遠くにいたカイルに向けて「今は休憩中か?」という意味を込めた視線を送る。

カイルが頷いたので、タクマは子供たちに向けて話を続ける。

「みんなが孤児院に向かつたあと、赤ん坊が起きたんだ。それで、赤ん坊をコラル様のもとへ連れていくて正式な養子の手続きをしてきたから、もうこの子はお前たちの妹だ。みんな、優しくしてやつてくれな」

赤ん坊は子供たちを見て泣く事はなかった。手を伸ばして触れようとしている。

タクマは、赤ん坊を子供たちに抱かせた。子供たちはいつも孤児院で赤ん坊の世話をしているので、抱き方も手慣れたものだった。

「僕たちはタクマお父さんの子供だよ。よろしくね」

「今日から私たちが家族だよ」

子供たちは、赤ん坊を抱きながら話しかけている。そんな光景を見て安心したタクマは、カイルの所へ移動する。タクマはカイルに、赤ん坊の両親の事、そしてエルフの若者たちが古い風習を変えるため立ち上がった事を伝えた。

カイルは感慨深げに言う。

「……疎まれて放棄されたと考えていたのは間違いだつたのか。少なくとも親には愛されていたんだな」

「ああ、あの子は愛されていた。だからこそ、両親を迎えて行こうかと思つてゐるんだ」

カイルは軽い感じで「いいんじやないか」と賛成した。さらに彼は、エルフの若者についての感想を口にする。

「それにしても、エルフは若い奴らを中心にならうとしているんだな。風習に疑問を持つ者が出るとは」

「そうだな。彼らは前に進もうとしている。これで、忌み子の風習がなくなれば良いんだが」

タクマはそう呟き、複雑そうな表情で、子供たちに構われる赤ん坊を見つめた。カイルが唐突に提案してくる。

「で、タクマはこれからすぐに行くんだろ? 僕が預かるうか?」

カイルは、タクマが大人しくじつとしているとは思っていない。すぐに赤ん坊の両親の遺体を探しに行くと思っている。だからこそ、赤ん坊を預かると提案したのだ。

タクマは一瞬迷いつつも、首を横に振る。

「そうだな。でも、あの子は夕夏に任せるよ。今は針子の手伝いをしているから、トーランにいるしな」

タクマはカイルとの話を終わらせると、子供たちの所に近寄っていく。

「さあ、みんな。そんなに構つてばかりいると赤ちゃんが疲れちゃうぞ。帰つてからでも会えるからこの辺にしておこうな」

タクマの言葉を聞いた子供たちは、素直に赤ん坊を返してくれた。

カイルが子供たちに向かって言う。

「ほらほら。お前たち、強くならなきやいけない理由ができたな。お前たちが力を合わせてその子を守るんだろ？」

子供たちはお互いの顔を見合させている。

今まで守られるだけだった子供たちだが、これからは自分たちよりも小さい存在を守らなければならない。

すぐに気合いの入った良い表情に変わり、子供たちは修業に戻つていった。

カイルは子供たちの相手を始めつつ、タクマに「早く行け」とジエスチャーで促す。タクマは手を上げて感謝を示すと孤児院をあとにした。

タクマは針子のトレスの自宅を知らないので、コラル邸に行く事にした。そこで、使用人にお願いして、夕夏を呼んできてもらおうと思ったのだ。

執務室へ移動してノックをすると、すぐに部屋へ入るように促される。

タクマを見て不思議そうな表情を見せたコラルだったが、タクマがヴェルドと話をしたと伝えると、すぐに事情を察してくれた。

「ヴェルド神様と話したか……で、結果はどうなのだ？」

話が早いコラルに促され、タクマは説明した。一通り話を聞いたコラルが腕を組みつつ言う。

「……そうか。忌み子の両親は、あの子を取り戻すために反抗したか……」

「ええ」

「それにしても、エルフの若者が風習に疑問を持つているとはな。そこだけは救いかもしねん」

「エルフの若者がどういう結果を出すかはまだ分かりませんが、とりあえずは静観してほしいとの事で……」

「確かに女神様の言う通りだ。エルフの問題はエルフが解決するのが一番良い」

理解を示すコラルに、タクマは続ける。

「その辺に関しては俺も賛成です。エルフの問題に距離を置くのは構いません。ただ、この子の親の弔いだけは、俺がしたいんです。この子に、両親からちゃんと愛されていたんだと言つて、育てやりたいんです」

「……分かった。私も同意見だから反対はしない。そういうえば、根回ししようとしていた長老との

面会だが、時間を空けた方が良いだろうな。若いエルフが事を起こせば、外の人間との面会どころではないだろうし。まずは王に報告だけを行い、エルフの状況を見ながら面会の機会を作るという事にしておこう」

「ありがとうございます。それで大丈夫です」

コラルとの話が終わる頃に、夕夏が来たと報告される。コラルは夕夏を執務室に通すように指示

した。

さつそく夕夏が執務室に入室してくる。

「使用者さんに来るよう言われたんですけど……」

「ああ、入ってくれ」

コラルは夕夏に向かつて、タクマの隣に座るように言う。タクマは夕夏にも、ヴェルドからの情報をお伝えた。

「そうだったの……じゃあこの子を愛していなかつたわけじゃないのね？」

「ああ……この子を取り戻すために戦つて……」

夕夏は、赤ん坊に悟られないように笑顔を作っているが、どこか悲しげだった。

赤ん坊はその微妙な空気を察して、グズり始めてしまう。夕夏は慌てて赤ん坊をあやしながら話を続きを促す。

「で、私を呼んだのはなんですか？」

「話だけならな。ちょっと急いでこの子の親を迎えて行こうと思うんだ。彼らは埋葬もされずに打ち捨てられている可能性が高い。早く行かないと、モンスターや獣にめちゃめちゃにされてしまうからな……」

夕夏は自分が呼ばれた理由が分かつたようだ。

「そつか。両親がどういう状態か分からないうから、赤ん坊を置いてタクマ一人で行きたいのね？」

分かつた。この子は私が連れて帰るわ

タクマは夕夏に赤ん坊を預けると、コラルに挨拶をして庭へ出た。

夕夏が赤ん坊とともに見送りに出てくれる。コラルは、タクマが話した事を報告書にまとめるため執務室に籠もるらしい。

タクマはアイテムボックスからスマホを取りだし、ナビにフォローを頼む。

「じゃあ行つてくるよ」

そう言つてタクマは、ヴェルドが示してくれた場所を思い浮かべて、空間跳躍を行つた。



「ここか……なかなか気味の悪い森だな」

タクマが到着したのは、どうやら森の奥深くらしい。木々が鬱蒼としており、昼間でも明るさを感じさせない。

「マスター、五分くらい歩くとヴェルド様が指定していた場所に着きます。湖畔の森とは違つて、敵対する生き物がほとんどです。索敵しながら進んでください」「分かつた」

ナビの指示に従つて、タクマは慎重に歩を進める。

「確かに、変な気配が多いな」

「地図にも表示されていますが、ここは『罪人の森』と言われています。罪人として処刑したエルフの死体を捨てていたために、土地が汚染されているのです。呪われた地というわけです」「つまり、エルフの風習に疑問を持った者や反抗した者を処刑していたという事か……」

歩いていると、生暖かい風とともに腐敗臭が漂つてくる。

匂いの方へ目を向ければ、木に吊るされた死体があつた。耳がとがっているので、エルフの死体で間違いない。

「おいおい、罪深い事この上ないな。こっちの用が済んだら、ちゃんと弔つてやるからな」

エルフの死体からは、瘴気が漏れだしていた。

きつと深い恨みを持つて亡くなつたのだろう。タクマは死体に向かつて手を合わせると、ゆっくりと歩きだす。

「マスター、なんだか嫌な予感がします。注意してください……」

ナビが言い終える前に、突如として地面が盛り上がつた。

這つて出てきたのは、ゾンビの群れだ。ざつと見ても三十体以上いる。

「エルフの成れの果てだらうな。だが、彼らをこれ以上苦しめるのは可哀想だ。浄化で安らかに眠つてもらおう」

タクマはそう呟くと、魔力を練り上げ、浄化の炎を発動させた。

そうしてそれを、ゾンビたちに向けて一気に放つ。

『あああ……光の炎……暖かい……』

『やつと逝ける……』

『神よ……奴らを地獄に……』

ゾンビたちは苦しむどころか、炎に包まれながら嬉しそうな声を上げて、やがて灰になつていつた。

タクマは、その灰が崩れ去るまでずっと見ていた。

「なあナビ、俺は今、むかついてしようがないよ」

「同感です。エルフはこんな事をして、心が痛まないのでしょうか」

タクマは手を合わせ、赤ん坊の両親がいるであろう地点に向かつてさらに歩を進めた。突発的にゾンビが出現するような事はあつたが、浄化の炎で弔いながら進行していく。木に吊られていたり、地面に捨て置かれていたりする死体がたくさん見られ、そうした死体は、動物やモンスターたちに食い荒らされていた。タクマはその惨状を見ては顔を顰める。

「きつとこの森も美しい場所だつたはずなのに……エルフの馬鹿げた風習によって、汚されてしまつたんだな」

「元々は普通の森だつたようだが、呪われた地に変えられてしまった。タクマはそうした風景を見